

あそびを学ぶ・あそびで学ぶⅢ；学びの過程の可視化の試み

遠藤 知里

問題と目的

1. これまでの実践研究とのつながり

筆者は、保育者養成の授業および正課外活動の中で「自然の中で遊びを通して学ぶ」という野外教育の手法を応用したプログラムを計画・実践し、そこに含まれる体験内容と、それがもたらす学びの内容について考察してきた（遠藤,2013; 遠藤,2014）。筆者は、これまでの一連の実践研究のまとめとして「体験をふりかえること」、「学びの過程に気づくこと」に着目し、1) 自分の体験についての「ウェブ」を自分で作ることの意味、2) 自然の中での遊びの中で生じる気づき・学びの内容、の2点についての考察を深めたいと考えた。

2. 保育における「ウェブ」作成の実践的意味

保育における「ウェブ」とは、子どもが表現したことや、それについての保育者の見取りを言語化し関係付け、線や囲みを用いて視覚的に集約した記録のことである。ウェブを作る作業は、「保育を構想する」仕事の一部を部分的に可視化し、同僚保育者や保護者と共有することを可能にする。

「保育を構想する」仕事とは、今日の子どもの姿から明日の保育を考えることである。保育者は、今日の子どもの遊びの過程から行為間のつながりを見通し、さらには子どもの内に生じた物事の理解のすじみちを想像し、明日の子どもの姿を想像している。恐らく、見取り（観取）と理解、先の予測（発想・想像）は、同時生成的に行われている。保育中は観取・理解・予測の同時進行の連続で、子どもとの間でさまざまな出来事が生じては変化し、子どもが帰るまで続いていく。その過程を正確に記録に留めておくことは難しいし、見落とさずに適切に対応したことであっても、後から振り返ると忘却していることも多い。しかし、こうした日常の仕事を意識的に、子どもの表し（子どもの「言葉」）と関連づけて記憶し、保育終了後にウェブを用いて整理することは、言葉を手がかりに見えないものの一部を可視化して、見えないものとまだ見ぬものを、共に保育に携わる他者と共有する手段として有効であろう。

また、ウェブは保育中に起こっていることを多元的に表す手段でもある。例えば、ひとりの子どもの動きと子ども集団の動き、遊びの発生と遊びの展開、さらには保育者が絶えず行っている予測など、時間的・空間的に異なる位置で生じることを同一の平面上に（視覚的に同時に）表現することができる。さらに、ウェブは部分的な可視化であるにもかかわらず、時間的・空間的な未来（まだ生じていないこと）が存在することを見る者に想起させる。ウェブを作るという行為は、子どもの遊びの過程を部分的に可視化することで、その先につながる「見えないもの」を他者と共に見ることを可能にする手段であり、他者と共に保育を構想する実践的方法といえる。

3. ドキュメンテーションが開く「対話」

筆者は、2011年にワタリウム美術館で開かれた「驚くべき学びの世界展」で、レッジョ・

エミリア市の保育実践が具体的にどのようなものであるかを知った。また、関連する文献を読み進める中で、ドキュメンテーションの有用性を知り、ウェブの可能性を知った。筆者が目にした文献（ヘンドリック, 2000）では、簡潔なドキュメンテーションに添えられた小さく単純なウェブが、子どもの言葉と共に、学びの過程と意味をはっきりと伝えていた。しかも「こういうことだった」という報告ではなく、どうということなのかという理解は見る側に委ねられているような共有感・臨場感・参加感があり、何か新鮮だった。「こういうことなのではないか」、「わたしにはこう思える」と伝え返したくなるような、そんなドキュメンテーションだったのである。実際に、他の保育者や子どもの保護者との間で、ドキュメンテーションからの対話が新たに生まれるのだと思う。

子どもの言葉に耳を傾け、子どもの遊びの過程から行為間のつながりを見通し、子どもの内に生じた物事の理解のすじみちを想像するという保育者の仕事のあり方、つまり子どもの姿から意味を観取し再構成していくという営みが、ドキュメンテーションに表れる。ドキュメンテーションは、こうした保育の実践知を可視化したものであり、すぐれたドキュメンテーションは、その場に居合わせなかった他者との間にも対話の可能性を開くのである。以来、「ドキュメンテーション」は筆者の実践上の関心事の一つとなった。子どもの姿から意味を観取し再構成していく道具としてのウェブの価値を、対話の感覚をそのままにして、保育者養成の授業の中に導入する方法の模索を始めた。

4. 体験を客観化すること・共有すること

「子どもと自分との間で生じた体験を客観化する」という行為がドキュメンテーションであり、それが保育の実践知を共有する方法のひとつであるとしたら、この中で「体験を客観化する」という行為は、保育経験に関わらず日常の中でも実践することができる。

短大保育科の科目群のうち、特に身体性の強い体験が含まれる体育系・表現系の科目では、クラス固定（特定の集団）で活動するために「わかってもらえる安心感」という場の構造の有利さがある。そのため、表現力が不十分であっても、理解や承認を得ることが難しくなく、体験の客観化や意味の共有を行いやすい。教員側としてはこうした利点を活かして、授業の中に「他者と自分との間で生じた体験に気づく」、「体験を客観化する体験をする」、「客観化したうえで互いに共有し、他者の視点を取り入れる」ということを学習内容の中にも含めることが容易である。さらにそのとき、「保育者的なまなざし（観点）」で自らの体験を理解できるような手助けを教員側が加えれば、それは保育につながる貴重な学習の機会となるだろう。2年間という短い期間ではあるが、短大での学びの中でそのような機会を多く持つことができれば、将来的に保育者となり日々の保育を構想する立場となったときに、汎化が期待できるのではないかと。体験の客観化と意味の共有は、保育系の学びの中でも特に身に付けておきたいジェネリックスキル（汎用的技能）であると考えている。

5. 研究の目的

以上の問題意識に基づき、本稿では正課（授業）、正課外での自然体験プログラムにおける「学びの過程」について、体験の客観化と共有の手段として用いた「ウェブ」に表れた言葉を手掛かりとして、保育職志望の学生にとっての体験の意味を考察する。

方法

本研究では、正課（授業）での自然体験で学生Aさん（本科1年生）が作成したウェブ（2件）、正課外の自然体験として実施した「ゆきぐにキャンプ」、「田舎暮らしキャンプ」で学生Bさん（専攻科2年生）が作成したウェブ（4件）について、ウェブとウェブに添えられたコメントを事例として捉え、内容を検討する。特に、1)自分の体験についての「ウェブ」を自分で作ることの意味、2)自然の中での遊びの中で生じる気づき・学びの内容、の2点についての考察を中心として、自然体験を通しての学びの過程についての見解を提示していく。以下、各プログラムの概要を示す。

1. 「夏の自然あそび」（体育Ⅰ・「環境と身体」）

保育科専門科目である「体育Ⅰ」の一部（授業90分×4回分）でプロジェクト活動を実施した。プロジェクトのテーマは「環境と身体・環境が引き出す身体活動」であった。その中の「夏の自然あそび」（13回目・14回目）では、短大近隣の長尾川、利倉神社、胸形神社等に移動し（徒歩10分程度）、それぞれのグループで遊びを考え自由に遊んだ後（約45分間）、ウェブの作成を行った。

2. 「ゆきぐにキャンプ」

2015年3月下旬に、長野県下水内郡栄村・秋山郷にて2泊3日のプログラムを実施した。秋山郷の自然と共にある生活を知ること、積雪地域の生活と自然を知ることを中心に、郷土食（早蕎麦、あんぼ）作り、かまくら作り、かんじきハイキング、そり遊びなどを行った。各日の終わりにウェブを作成した。

3. 「田舎暮らしキャンプ」

2015年8月中旬に長野県下水内郡栄村・小滝、菅沢の各集落で、2泊3日のプログラムを実施した。集落の伝統行事への参加や農業体験を通して、栄村の生活を知ること、食と自然のつながりを知ることを中心に、お盆のお祭りの夜に集落の一般家庭で夕食を頂く、お祭りの「提灯行列」への参加、開拓農地での加工用トマトや夏野菜の収穫、収穫した野菜を使った食事作り等を行った。プログラム最終日にウェブを作成した。

結果と考察

1. 「夏の自然あそび」（体育Ⅰ「環境と身体」）のウェブ

1.1. ウェブとコメント

（夏の自然あそび・7月13日）

「川遊び。散歩して川へ行く⇒川に入る（足だけ）⇒手も（水に）つける」

「石がいっぱいあるので、素足で川へ入ると足を切ってしまうたり、爪がはがれたりする可能性もある。小さい子だと溺れてしまう危険も。あと、太陽の光が強いので帽子は必需。」「水遊びはとても楽しいが危険とも隣り合わせである。ケガをしないようにゆっくり移動をしたりした。暑い日に体を濡らしてダイナミックな遊びをするのはとても楽しい!」「子どものケガに注意しなければならない。みんなが見える位置にいて、全員を平等に見なければならない。はしゃいで遊びがち

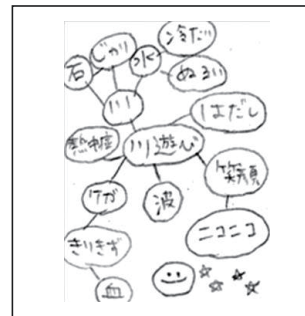


図1 「夏の自然あそび」ウェブ（7月13日）

な子どもにゆっくりした遊び（例えば草葉の船）を提案するのもいいなと思う。」。

（夏の自然あそび・7月20日）

「川遊び（やすらぎ）。散歩して川へ行く⇒木陰で涼む⇒川で遊ぶ⇒川岸で涼む」

「深い所は流れが速くて足をとられそうだった。石にコケがついて滑りやすかった。石のところで遊んでいたで頭を打たないように気をつける。」「（子どもは）木陰や日陰で自然を楽しむより、川で遊びたい気持ちが強いのでは。木陰にいと風が涼しくて、子どもたちは眠たくなってしまふかなと考える。楽しんで遊んで、疲れて木陰で寝そう。」「日陰に座って、夏のうたを歌ったりしてもいいなと考える。トンボがいたらトンボの歌もいいなと思う。川に入って遊ぶ以外にも、いろんな遊びを考えてやりたい。」

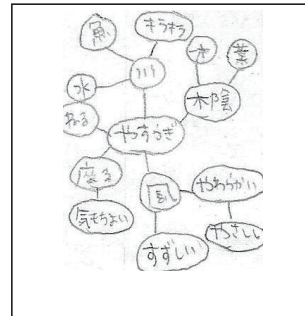


図2 「夏の自然遊び」ウェブ（7月20日）

1.2. 学びの過程の解釈

ウェブに表れた言葉は、名詞と形容詞がほとんどであり、動詞は少ない。自然環境からの刺激によって自分自身が感じ取ったことを中心に、素朴で具体的な経験から再構成されたウェブであることが特徴的である。身体で感覚したことから自然に生起する感情は日常の感覚と連続するものである。ひとつつながりのものも「川遊び」⇒「笑顔」⇒「ニコニコ」、「風」⇒「やわらかい」⇒「やさしい」、「やすらぎ」⇒「ねる」⇒「気持ちよい」など、身体感覚的である。こうした解釈のあり方からも、自分自身の感覚を子どもの感覚と同一のものとして捉え、自分自身を子どもの姿を想像するよりどころとしていることが感じられる。

以上より、自分自身の体験についてのウェブを作成することは、他者（子ども）の感覚を想像するよりどころとしての自己の感覚への気づきを得る機会となっていると考えられる。このように、自らの感覚を出発点として子どもの姿を想像することで、体験を見る視点を自己から子どもへと移し、よい保育者の姿をイメージするという過程を自覚化することを、自らの体験からウェブを構成することの意味として捉えてよいのではないかと。

2. 「ゆきぐにキャンプ」「田舎暮らしキャンプ」のウェブ

2.1. ウェブとコメント

（ゆきぐにキャンプ・3月18日）

「越後湯沢駅に到着。駅にて雪景色を見る。静岡での生活から見ればとてもめずらしい風景に感動する。」

宿に到着しかまくら作りをする。今までも雪がある場所に旅行やレジャーに行ったことがあったが、かまくらを一から作るのは生まれて初めての体験だった。

あいあいさんに作り方を教えてもらいながらまずは土台の雪を足で踏み固め、その上にスコップで雪を載せ、山を作っていく。かまぐらの屋根ができあがり、中をスコップで掘



図3 「ゆきぐにキャンプ」ウェブ(3月18日)

と体力が必要だった。かんじきを履いてからは、足が雪の中に沈むことがなくなった⇒雪国に暮らす人々の生活の工夫に触れることができた。滝をめざして歩いていく途中、ウサギの足跡やシラカバの木など、自然やそこに暮らす動物の生態について学ぶことができた。大瀬の滝では、一面の雪景色の中で力強く流れる滝の美しさに感動した。チョコフォンデュを食べ、少し休憩をしてからそり遊びをした。自然の雪の上を滑ることに對し、最初は緊張もあったが、何事も挑戦と思いチャレンジをしたらとても楽しく新鮮だった。

このハイキングを通して学んだことは、「アンテナを張る」ことだ。同じ「歩く」ということでも、ただ歩くのではなく、いつもより注意深く周囲に目を向けることで、自然の植物や木々の様子、動物の足跡など、学びのヒントを見つけることにつながる。」

(田舎暮らしキャンプ・8月18日)

「3日間のキャンプを通して一番印象に残っていることは、1日目の小滝のお祭りに参加したことだ。自分の住んでいる地元のお祭りは屋台やしゃぎり、お神輿といったものが中心であったので、自分が想像していた「お祭り」のイメージと違い、すごく驚いた。特に、提灯行列は、提灯の灯りがとても幻想的で、一緒に行列に参加させていただいたことはとても貴重な経験となった。小滝の人々の生活に自然に入るきっかけにもなり、嬉しく感じた。また、夕食を地元の方の家で頂き、最初はすごく緊張したが、お世話になった家の方が本当の家族のように優しく気さくに接して下さり、人の温かさを感じることができた。小滝の人々の生活を身近に感じて、「人と人とのつながりの中で生きる」素晴らしさに気づくことができた。さまざまな人、年代の方の話をたくさん聞いて、自分の視野を広げる糧にしたいと考える。」

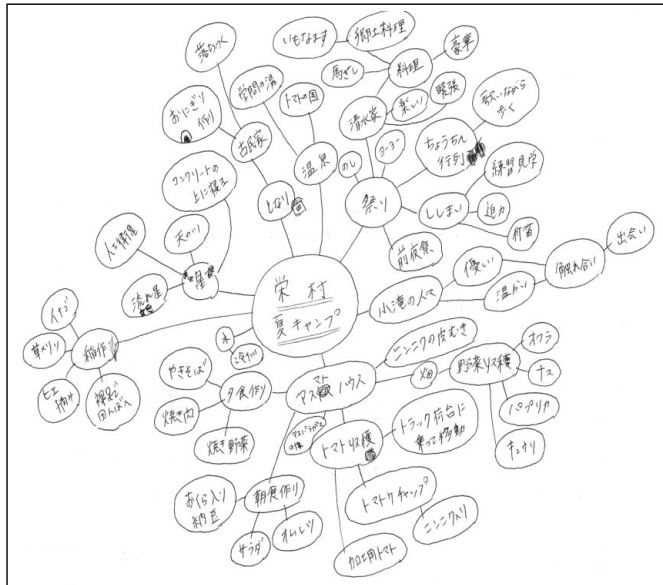


図6 「田舎暮らしキャンプ」ウェブ (8月18日)

3.2. 学びの過程の解釈

ウェブの中に端的に表されている言葉は、想起された内容の中のごく一部が表面に表れているようなものであろう。意識の中に言葉の形で浮かんだものを手がかりに、想起したことをとどめておく方法として、ウェブは優れている。

「ゆきぐにキャンプ」初日 (3月18日) ウェブの特徴は、全体的に簡単な単語で表現されていることである。この日の主な活動は、雪でかまくらを作ることであった。かなり長時間にわたって作業が続けられたが、「固い」、「冷たい」と表されているように締まった雪を掘り進めるのは想像していたより困難であったようで、ウェブの中では「集中」⇒「時間を忘

れる」と、簡潔な表現で書きとめられている。また、猟の話や熊の胆の話など、出会った人から伝え聞いたことも表現されている。伝え聞いたこともウェブの網の中で関連づけられており、間接経験として「他者の経験を聞くこと」の価値への気づき、自身の直接体験の意味理解を助けるものとして、他者の話を取り入れていることが感じられる。

「ゆきぐにキャンプ」2日目(3月19日) ウェブの特徴は、言葉の密度の高さである。この日の主な活動は、昨日に引き続き雪でかまくらを作ることであった。昨日との違いは、形がほぼ出来上がり、「もっと天井を高くする(中で立つことができる高さ)」、「全員入って食事できる広さにする」、「テーブルやベンチを作る」というように、仲間の間でイメージを共有しながら思い思いに作業をすることができた。ウェブの中にも「体験や活動を通して深まるコミュニケーション」⇒「自然と会話し、(仲間との)距離が近くなる」と、作業についての意味の理解が書きとめられている。

また、この日は近所の子どもと一緒にかまくら作りをする、その子どものお母さんからおやつや差し入れを頂戴する、別の家から「お茶のみ」(休憩)に招かれる、その家で自家製の豆腐や漬物をご馳走して頂く、など、地域の人々との偶然の出会いに満ちた一日であった。また、近所のお母さんから郷土食である「あんぼ(あっぽ)」の作り方を教わり、手を動かしながらのさまざまな会話の中で、ひと昔前の村の婚礼のしきたりや村の生活について知った。こうした出来事から、「出会い」⇒「そこでしか出会うことができない人々」⇒「積極的に質問することで知ることが増える」⇒「自分の関わり方次第で変化が起こる」⇒「他者と関係を作る力」という、体験に基づいたひとつつながりの解釈がウェブに表されている。

「ゆきぐにキャンプ」3日目(3月20日) ウェブの特徴は、初日同様に簡潔な言葉で表されていることである。この日の主な活動は、かんじきを履いてのハイキングで、雪や自然とのコンタクトが中心の活動であった。ツボ足では足をとられてしまうのにかんじきを履くと容易に歩ける驚きと、培われてきた生活の工夫への気づきがあったようだ。途中、ウサギの足跡をはじめとした動物の痕跡を発見するなど、動物の生態を想像するきっかけを得た。また、大瀬の滝では美しさに感動した。滝ではゆったりと時間を過ごし、そり滑りにも挑戦した。「ハイキング」⇒「アンテナを張る」⇒「観察力・「疑問」・「発見」というひとつつながりの解釈がウェブに表され、コメントにも「このハイキングを通して学んだことは、「アンテナを張る」ことだ。同じ「歩く」ということでも、ただ歩くのではなく、いつもより注意深く周囲に目を向けることで、自然の植物や木々の様子、動物の足跡など、学びのヒントを見つけることにつながる。」と締めくくられている。「アンテナを張る」こと、すなわち「見えないものに対する感度を上げること」への気づきを得たようだ。

「田舎暮らしキャンプ」(8月18日) ウェブの特徴は、野菜や料理の名称など「モノ」の名称が多いことである。3日間の体験の中で、収穫や食事作りなどの作業を通して野菜に直接触れ、手触りや香り、味わいを知ることが多く、その体験が「モノ」の名前に託されて留められている。また、「小滝の人々」⇒「優しい」・「温かい」⇒「触れあい」⇒「出会い」というひとつつながりの解釈がウェブに表され、コメントにも「(小滝集落の)提灯行列は、提灯の灯りがとても幻想的で、一緒に行列に参加させていただいたことはとても貴重な経験となった。小滝の人々の生活に自然に入るきっかけにもなり、嬉しく感じた。」と、小滝集落に自然に入り込むことができたことへの感謝が語られている。「お祭り」という、ハレの日の特別な雰囲気にも助けられた。さらに、「夕食を地元の方の家で頂き、最初はすごく緊張

したが、お世話になった家の方が本当の家族のように優しく気さくに接していただき、人の温かさを感じることができた。小滝の人々の生活を身近に感じて、「人と人とのつながりの中で生きる」素晴らしさに気づくことができた。さまざまな人、年代の方の話をたくさん聞いて、自分の視野を広げる糧にしたいと考える。」とも語っている。冬のキャンプと夏のキャンプを通して、厳しい自然環境の中で自然の恵みを受けながら生活することは、人と人とのつながりの中で生きることであり、今後の自分の生き方を考えるきっかけとなったようだ。

3. 総合考察

以上、学生が作成したウェブを事例として、ウェブおよびコメントに表された言葉を手がかりに、学びの過程についての考察を試みた。それにより、保育職志望の学生が自分自身の自然体験についてのウェブを作成することについて、次の2つの意味を捉えることができた。1) 他者（子ども）の感覚を想像するよりどころとしての自己の感覚への気づきを得る機会としての意味。2) 想起されたことの一部を端的に言語化しておくことにより、全体を他者と共有するための手がかりを与えるものとしての意味。

ここでは、自然の中での遊びの中で生じる気づき・学びの内容について、全ての事例を総合して考察する。

3.1. プログラムのねらいとの関係から

参加者が作成したウェブを見ることで、ねらいが達成されたか（指導者側が期待する体験が生じているか）を確認することができた。

「夏の自然あそび」では、自然環境とふれあうことによってもたらされる身体の感覚に気づくことがねらいであったが、川の流れや河床の石、生き物、太陽の日差し、風などがもたらす感じをとどめる言葉である「冷たい」、「ぬるい」、「すずしい」、「キラキラ」、「やわらかい」、「やさしい」などがウェブに表され、「笑顔」、「ニコニコ」、「気持ち良い」といった身体で感じたことがひとつつながりの解釈の中に表れていた。また、「ゆきぐにキャンプ」、「田舎暮らしキャンプ」では、「生活と自然のかかわり」に気づくことがねらいであったが、「体験や活動を通して深まるコミュニケーション」、「自然と会話し、(仲間との)距離が近くなる」、「自分の関わり方次第で変化が起こる」、「他者と関係を作る力」など、生活と切り離せない「人と人との関係」に関連する言葉がウェブに表されていた。

また、文章での表現と比較して、ウェブでは線で結んで表現するような「ひとつつながりの解釈」をとどめておくことに無理がない。そのため、生成途中のような曖昧な感覚でもその痕跡を残すことができる。体験の中で得たことを個人の文章表現力に関係なく表現できるのは有用である。また、体験を共にした者同士が、その表現から直観で理解しあうことも容易である。こうした、言葉の向こう側にあるものを共有するというのも、保育職を目指す者として体験しておきたい学びの過程のひとつとして捉えることができそうだ。

3.2. 「時間」との関係から…他者との対話で深まるもの

正課（授業）では、自然体験そのものに充てる時間も短く、体験をふりかえりウェブを作成する時間も短い。そのためか、ウェブに表れる言葉は端的で感覚的であった。一方、正課外のプログラムでは、2泊3日という長い時間軸の中での活動であったためか、ウェブに表れる言葉には文章の形をとるものがみられ、ひとつつながりの解釈も複数表現されていた。これは、体験を言葉として表すためには、体験の間に十分な時間が必要であることを示唆する

ものである。また、体験の間に他者との対話の機会が多くあったことが、ウェブに表れる言葉を豊かにし、つながりを生起させているようにも感じられる。特に、「ここでしか出会えない人」との対話をふりかえる中で、保育職としての将来の自分のあり方につながる解釈が生成していることが印象的であった。自然体験を出発点として、他者との対話の機会と、それを自然にふりかえる十分な時間があったという条件により、自己との対話が促進されて、体験の意味理解をもたらしたのかも知れない。

3.3. ウェブが全てを可視化しないところに意味がある

本研究では「学びの過程の可視化」の可能性をウェブに求めてきたのであるが、事例の検討を通して、ウェブは全てを可視化せず、むしろウェブが可視化することは極めて限定的であることを明示する結果になった。ウェブに表現されていないことを指し示すことが、ウェブの意味といえるのではないか。保育という営みは、子どもが体験していることについての、保育者同士の共同注視によって支えられている。つまり、目に見える出来事が手がかりに、直接見ることができない子どもの体験の中身の意味を保育者同士で共有しているのである。これは非常に高度な専門的技術であるが、ウェブを用いることでそれを容易にすることができ、他者に開くことまでも可能にしているのがレッジョ・エミリアの保育実践でもあった。保育職を目指す学生が、体験をウェブにする作業を通して「見えないものを共有するための部分的可視化」の意味に気づき、その道具としての「言葉」の重要性を発見するきっかけを得ることが、保育者養成段階でウェブを活用する価値といえる。

結 論

本研究の目的は、正課（授業）、正課外での自然体験プログラムにおける「学びの過程」について、体験の客観化と共有の手段として用いた「ウェブ」に表れた言葉を手掛かりとして、保育職志望の学生にとっての体験の意味を考察することであった。「夏の自然あそび」、「ゆきぐにキャンプ」、「田舎暮らしキャンプ」の各実践において、保育職志望の学生が作成したウェブを事例的に検討し、学びの過程の一端を知ることができた。

ウェブは「言葉」という表象を用いて、言葉の向こう側に存在するものを常に示唆する。こうした「見えないもの」の存在に対し、共にまなざしを向けて理解を共有していくことを体験的に学ぶ機会として、自然体験を用いたプログラムは有用である。

文 献

遠藤知里（2013）あそびを学ぶ・あそびで学ぶ：「石の水切り」への取り組みから、常葉大学短期大学部紀要（44），115-123.

遠藤知里（2014）あそびを学ぶ・あそびで学ぶⅡ：「雪遊びキャンプ」への取り組みから、常葉大学短期大学部紀要（45），167-179.

ヘンドリック・ジョアンナ（2000）J. ヘンドリック（編著）石垣恵美子、玉置哲淳（監訳）レッジョ・エミリア保育実践入門—保育者はいま、何を求められているか。北大路書房.

<付記>

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「「自ら学ぶ」保育者を育てる野外教育プログラムの開発」（課題番号：25350745，研究代表：遠藤知里）の一部として実施したものです。また、「ゆきぐにキャンプ」、「田舎暮らしキャンプ」は、NPO 法人信州アウトドアプロジェクト・鍵水愛さんと、柴村の皆様にも全面的にご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。